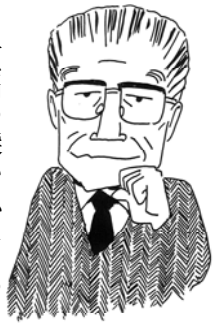


浄土真宗を学ぶについて、確かにこころえておかなければならぬことは、真宗における信心とは、単に自分の意識のところ、「そう思う」とか「そう心がける」というようなものではないということとです。信心とは、たんに思いを改めたり、心をきりかえることではありません。人間の存在の一番深いところ、それは生命とも呼ばれるところにかかわる問題なのです。その生命のところを念仏の教えを聞いて、その古い生命がつきくずされ、うちこわされていき、それにかわって、仏にめぐまれた新しい生命に、生まれかわっていくようになることです。そういう、もつとも深い、生命の体験を信心というのです。だから真宗において信心をうるということは、生命の変革であり、人間の脱皮と成長を意味しているわけです。その点、信心をうるということは、その日々の生活に、信心をえたること、「しるし」がにじみでるはずで

お念仏のしるし

「生命の体験」

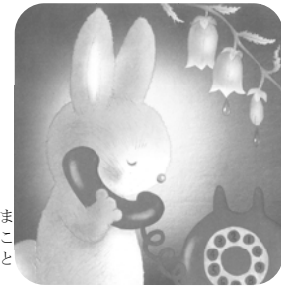


もとより煩惱の深い私たちのことですから、きれいさっぱりと善人にかわるということとは、とうていありえないことでしょう。しかしながら、たとえどれほど煩惱が深くて、生命の変革、人間の脱皮と成長としての信心をうるところには、その信心の「しるし」として、煩惱との闘いのあとがにじみでてくるはずで。そしてまた、念仏にみちびかれ、浄土を願う心から、日々の生活にも何ほどかの心深いおこないがこぼれてくるでしょう。信心はいただいたけれども、日々の生活は少しも変わらぬ、というのではどうにも納得できません。真宗における信心とは、たんに知識や意識の問題ではなくて、私たち一人一人の生命の問題であり、したがってまた、私たち一人一人の日々における生きざまにかかわる問題なのです。

『この道をゆく』

越しいただき、お話を頂戴しました。開催にいたるまでに数回、一三ヶ寺の住職や仏婦会長が集まり、テーマや内容について打合会をいたしました。当初内容について二つの案がありました。一つは戦後七〇年なので平和にちなんだテーマか、それとも「俱会一処」というテーマにするかでした。平和問題は大切なテーマですが、この「俱会一処」もとても大切なテーマです。「俱会一処」とは阿弥陀経に出てくる言葉ですが、いずれ必ず一人一人の問題になります。昔から俱会一処については、いたる所で語られていますが、どうも話す方も聞く方も、そのとらえ方がバラバラではないかと思うのです。それぞれが自分の事として、一度確認しておくべきではないかということからこのテーマに決まりました。

す。その別れから遺族が願うのは、皆この俱会一処ではないかと思うのです。戦争であろうと、自然災害であろうと、病死であろうと、事故死であろうと、どのような死であろうとも、遺族の願いは、「もう一度会いたい」ではないかと思うのです。昨年のお盆にも見ていただきましたが「かぜのでんわ」という絵本を今回も見えていただきました。そこには別れた人に「会いたい」という気持ちが出るという心に応えて、会えると言っているのは浄土真宗だけではありません。キリスト教でも、天国であろうといい、他の宗教でも同じように会えると言います。一般でもNHKが「東日本大震災 亡き人との“再会”」というテーマを取り上げたり、日常的にも「あの世で会い」といわれたりします。どうしてそういうことが言えるのか。またどの宗教でも、あるいは無宗教でも会えるのだろうか。どれも同じなのか。私たちの浄土真宗の「俱会一処」は



他とどう違うのだろうか。そんな疑問は生まれなくていい。そんな疑問は生まれなくていい。「あまり、こだわらなくても」と言う声も聞こえてきそうですが、ただ何となく、みんなもそう言うし、そう言うっておけば安心する、と言うような気休めではないつか足下から崩れて行くのではないかと思うのです。前住職は仏教は「そう思う」とか思い込みといったようなものではなく、智慧の宗教であり、本当のことがわかる宗教だと言います。

凡夫である私の当てもならない考えだとか感覚をたよりにするのはなく、仏さまの真実に出会い、まことのいのちにふれることで、本当の俱会一処を実現するのです。一般に会えるというものの中には、根拠もなく、怪しいものまで色々あります。しかしこの仏教の俱会一処はそうしたものは全く次元の違うものなのです。真実なるものだから、死んでからの話してはなりません。いま真実にふれることで、同じ生命につながるのです。念仏に生きるものは本当の意味で会えるんです。しっかりとした根拠をもった「会える」なのです。私たちがお念仏申し、仏さまにお参りし、そして報恩講も、法事も、全てその真実にふれるご縁なのだと思うとき、いよいよ大切にお勤めしたいと思うことです。



安楽寺法要案内

一月	御正忌	日時 1月16日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 住職自勤 講題 仏はどこに
二月	涅槃会	日時 2月13日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 湯来 西法寺 吉崎哲真師 講題 苦とは何か
三月	彼岸会	日時 3月12日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 関西大学非常勤講師 源淳子師 講題 一人(いちにん)に立つ めざめ体験とは



暮らしの中の仏教語 『有り難い』

「ありがたう」は一般的に感謝や御礼の心を表す日常語として常識になっていますが、その起りは『法華経』の「是の諸の菩薩は甚だこれ有り難し」という経文からであるといわれ、もと「あることが難しい」「めったに会うことができない」といった意味だったのです。つまり感謝を示す「ありがたう」は、「めったにないことをしてくださって感激です」という意味にな

ります。三帰依文に「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く。」とあるように、人間として生まれることや、仏の教えに会うことは、なかなか難しく、有り難いことなのです。どんな時でも、誰に対してでも、すなおに「ありがたう」といえるようになります。



あなたをへふるさといへ

吳市長迫国民学校の
浄蓮寺集団疎開から
七十年 (座談その二)

食べ物はどうでしたか

呉では配給で、疎開に行くまでが大変でした。志和に来て白いご飯がうれしかった。けれどだんだん少なくなつて、終りごろはおかゆになりました。はじめは固いのがやわらくなりました。子どもがおなかのすいたというのが情けなかつた。炊事は夫婦の人が呉から来て世話をしてくれました。

夏になると野菜が少なくなるから近くの農家の人が持ってきてくれました。豆や米のあられを持ってきてくださいました。

何とかしたいとサツマイモを植えました。茎や葉も食べるつもりだったが芋ができる前に呉に帰りました。呉の学校が焼けた時、飼っていた豚が焼けた死にました。呉に残っていた男の先生が焼け死んだ豚の肉を疎開先のお寺や学校の子に配ってくれました。ほんの少しだったけれどおいしかった。

困ったこと

初めてシラミをみました。足元がもそもそするのでみるとこれがシラミ。第二次疎開のころから増えてきました。日の当たるところでシラミの取っこをしました。蚊は呉にもいましたがシラミには苦労しました。

お風呂について

お寺の風呂に二十人余りがはいるので何度も沸かし

かえました。暑い時だからよかったです。行水したり、川で洗濯をして桃太郎の話を出しました。冬までいたらどうなっていたか、志和は冷えるそうです。食べ物不足して皮膚病が増えてきた。疥癬が出てきました。

引き揚げ

九月十七日に枕崎台風。松根油を採るため山の松を皆切ったから山が大なだれ道が無くなって引き上げが延期になりました。二十五日によろやく帰りました。山があちこちで崩れているところはトラックを降りて、トラックが乗り越えたらまたのって帰りました。呉に帰ったらすっかり焼けいていました。当時暴力の街といわれていた。仁義なき戦いの舞台にもなりました。

最後に一言ずつ

桐山さん 田植えを手伝おうと入ったら赤い湿疹。申し訳ないと思いつながら見ていました。

北川さん 麦刈りなつかしい。それまで鎌をもったこともありませんでした。小島さん いい思い出。風邪をひいたとき先生におかゆ食べさせてもらいました。

和田さん 志和に行つてみたい。並滝寺、池がなつかしい。並滝寺には三回行きました。

青木先生 とにかく二度と戦争はいやですね。今の政治を見ていると心配です。国民一人一人に考えてもらいたいのです。つらいことあったけれど乗り越えたから今があります。



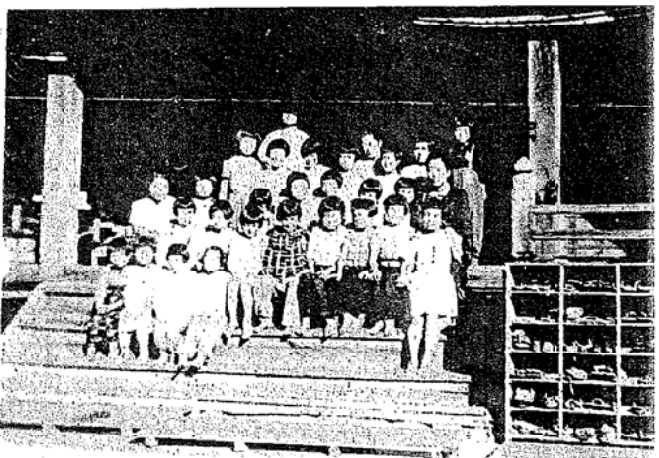
深く生きる人生 それは 目覚めて生きる人生

その他の思い出

坊守さん(前々坊守初子さん)いい方でした。御嬢さん(智子さん)は体が弱かったから心配されていました。三十年前浄蓮寺に行ったとき、お嫁に行ったことを聞いて、よかつたと思いました。御嬢さんにわら草履の作り方を教えていただきました。その草履をはいて学校に行きました。

終戦後学徒動員に行つていた一番上のお兄さん帰つて来られ離れに住んでおられました。やさしい人で、お話もしていただきました。坊守さんには息子が帰つてきたことを人に言わないでくれと頼まれました。暴徒が来るのを心配しておられました。帰るとき集合写真を撮ってくださいました。

アメリカが上陸したら疎



開の子供をどうするか先生達で相談しました。

食糧、医療貧しかった。

田舎には食べるものがあると思っていたけれど、農家でも供出のため大変でした。皆から助けてもらいました。穏やかな日々があったからこそ、今まで長生きできました。忘れられません

(疎開の子は綺麗な服を着ていた)子どもたちは疎

開に行くというので一番いい服を用意してもらってきました。

アメリカに行つて博物館に展示してあるB29をみました。こんな小さな飛行機かとびっくりしました。

青木先生は志和東小学校百二十年記念誌の学校の写真を見て「ここで疎開の子が勉強していました」と校舎の一角を指差されました。

志和の皆さんに大変お世話になりありがとうございます。

* * *

とにかく預かった子どもたちを無事に呉に帰してやることに懸命だったことが伝わった一時でした。

今回の取材は「二度と戦争はいけません」という青木先生の言葉に尽きます。

厳しい状況の下での疎開生活の中にも、皆でとなえる正信偈のお勤めの穏やかな時間があつたことはありがたかったです。浄蓮寺や東志和小学校の出来事はたつた七十年前、日本全国であつたことです。集団疎開以外にも田舎の親戚に預けられた子、身体が弱くて疎開できなかった子、そして戦渦に巻き込まれた子どもたちが大勢いたことは忘れてはなりません。

ご法義の地である志和も戦争と無関係ではいられません。けれどもお念仏をいただくご縁は絶えることがありませんでした。どんなことがあつても阿弥陀様の御本願を聞かせていただくご縁をお取り持ちしてまいりましょう。

終わる

戦後七〇年

忘れられない思い出

上山田小学校児童の疎開

佐藤 園江

戦後七〇年の今年、高齢の人達が重い口を開いて戦争体験を語って下さり、その悲惨さに改めて胸の痛む夏であった。

小学校時代を太平洋戦争の中で過ごした私にとって、小学校生活は即太平洋戦争であり、集団疎開生活であった。疎開児童と呼ばれて齟齬した半年ほどの生活は、七〇年も昔のことでありながら、決して忘れられるものではない。

四月九日、朝暗いうちから母が弁当を作ってくれた。当時としては珍しい「馳走巻き寿司」であった。はしゃいで家を出て校庭で出発式を待っている。母の妹が走り寄ってお守り袋を渡してくれた。

「お金が入れてあるけんね。呉が焼けてしもつたら、一人になつてもつたら、その時に開けるんよ。」

最後は涙声であったが、私にその涙の意味はわからなかった。

呉駅まで歩き、汽車を乗り継



いで甲立駅まで。その後は、男子三〇人が郷野村の善立寺。男子三〇人は刈田村の専念寺。女子六〇人全員で根野村の善教寺へトラックで移動した。

私たちが善教寺へ着いたのは、午後二時過ぎ。村の人達が総出で出迎えて下さり、心づくしのお赤飯をいただいた。余間に荷物を入れさせていただき、夕方になって開いた弁当は腐っているから捨てるように指示された。

次の日、最初の作業は杉の皮はぎだった。寺の横にある杉林に入ると大きな木が何本も切り倒され、五・六〇cmおきにのこぎりで切り目が入れている。竹で作った大きなへら状のもので、杉の皮を剥ぎ取ると、長方形の杉の皮ができた。これが疎開児童用に急造された特設便所の屋根になった。

村の人は大変よくして下さった。高等科の人達は交代で家を回り、背負ったメゴの中に野菜をもらい集めて届けて下さる。みんな不自由なときに、こうして届けて下さった野菜が疎開児童のご馳走になった。

六月二十八日のこと。突然荷物を片付け

るように言われ、善教寺の女子は全員郷野村の元浄寺に移った。同じ日、刈田村では男子三〇人が専念寺から明願寺へ移ったと聞いた。この突然の移動が、本土決戦に備える特攻機の出撃基地設置のためであったことは、ずっと後の平成六年に知ったのである。

七月一日、郷野村に六〇人も増えるのは無理ということ、吊り橋を渡った可愛村の法円寺に二〇人が移動した。

翌七月二日は面会日。朝早く起きてみんな念入りに床を磨いていた。役場の人の出入りが激しい。村長さん、助役さんが先生方と忙しくささやくように話しておられる。きょうは面会日だから大変なのかなあと思っていると、本堂集合の音がかった。

「きょうの面会は取りやめになりました。」静かな先生の声。昨夜から今朝にかけて、呉市が大空襲を受けたこと。上山田小学校も全焼したし、みんなの家もほとんど焼けてしまったこと。家の人の安否は全くわからないことなどが告げられた。

我慢強く歯を食いしばっていた疎開児童がこの時だけは声を上げてみんな泣いた。

次の日から焼け出された家の人に引き取

られて郷里へ移っていくなど、淋しくなるばかりであった。元浄寺へ移った私たちは目の前に小学校があるのに通学した記憶がない。疎開児童だけのお宮やお寺で勉強をしていた。男子もこの時期は学校に行かず、繰上夏休みになっていたので、毎日よく遊んだそうである。

その時期小学校は特攻機の滑走路づくりをする軍人の宿舎になっていたとか。最近になって話を聞いて驚いている。

九月十七日、三日前から始まった上山田小学校疎開児童のトラックによる引き揚げ最終日。元浄寺組の女子は三〇名あまりになっていた。降り続く雨はその日もますます強くなり、ようやく迎えのトラックが来たのは予定より数時間遅れの昼過ぎであった。根の谷峠のあたりでは雨がますます激しくなり、道路は川のようになっていた。

児童は全員荷台に乗り、幌をかぶっているのにびしょ濡れ。高学年は幌の端を握りしめる手が凍り付くように冷たくなったのを今も覚えている。運転台に乗っておられる引率の先生と運転手さんの声。「駄目です。橋が無い。」「この道も駄目。」「きつと広島市内を走っていたのでしょ。生きて心地も無くただ黙って震える身体を寄せ合っ

ていた。

どのくらいだったのでしょうか。呉駅に着きました。トラックが故障したので乗り換えます。気をつけて。「引率の先生の指示。大人の人達が裸電球で照らしながら、一人一人を抱きかかえ、乗り換えさせて下さった。

トラックは走り出したものの堺川が渡れない。「とにかく上がってみます。」「運転手さんの声が聞こえる。道が狭くなり、街路樹の枝が幌にかかる中をすり抜ける。

「助けてえ」という叫び声。ようやくトラックが止まったのは辰川だった。町内会の事務所のようなコンクリートの建物の中で、婦人会の人が一晩中火を燃やし、暖を取らせて下さった。震える身体をこすりながら、勿論一睡もできず、夜が明けのを待ち続けた。

外が白むころ、婦人会の人も引率の先生も見えなくなった。先生は連絡を取りに出られたのでしょ。でもみんなは待ちきれず、勝手に外に出てしまった。



先頭と最後尾を六年生が守り、一人の怪我人も出さず呉港中学校の上までたどりついた。見下ろした呉市に街は無く、目の下に伏原神社、遠くに呉駅がぼんぼん見えた。九死に一生を得るといふが、あのひどい枕崎台風の中を上山田小学校疎開児童引き揚げ最終便の、元浄寺組は全員、生きて帰ることができたのである。

あれから七〇年。ただただ感謝。 〇〇掌。

(平成六年十一月十二日から二十日迄中国新聞で企画された「ひそな」の戦争、第六部「山の飛行場」により、特攻機の滑走路工事の事実を確認した。)

※挿し絵、写真はイメージです。本文とは関係ありません。